

‘Its’ の誕生

— 仕方のない新造語 —

— 英語の語源と由来 —

菅 沼 惇

目 次

1. 現代英語での ‘its’ — Donkelの話に目を覚まされて—
2. 古期英語での3人称単数中性代名詞属格 — his —
3. 中期英語での場合
4. 近代英語での場合 — ‘its’ の誕生 —
5. その作因は？

1. 現代英語でのits¹⁾ — Donkelの話に目を覚まされて —

ある日の夕方、仮寝の目にあの独特の顔・風格が入って来た。いや私はその頃この人に惹かれてばかりいた。ガット事務局長のドンケル氏だ。訪日で記者団と話をしているのであった。全部は耳に入らなかったが、大体次のようなことであつた。

(1)²⁾ Each country has its own special agricultural product, ...³⁾

丁度良い生きたことばを掴まえたと思ったものである。そして翌日の新聞にやはり次のような記事が出ていた。

(2)⁵⁾ 包括関税化「例外は認めぬ」ドンケル氏記者会見

注 1) 筆者管見ながら、まあ何とこの ‘its’ について、普通の記述とか、用例にしても、記述或は触れてでもいる文法書（研究書、啓蒙書、参考書）のないことよ。いわんや史的経過に触れてでもいるのは、さすがの Onions もしていない。『英文法シリーズ』が少ししているだけである。そこでこの拙論「英語の語源と由来」シリーズの価値というものか？

2) '92年9月1日（火）だったか、夕方のTVニュースのひとつから。

3) 以下下線は特に断らない限り著者による便宜上の印である。

4) 以下点線は特に断らない限り著者による文中一部分省略の印である。

5) '92年9月2日（水）付朝日新聞。但し縦書き。

合意期限, 来年3月

「各国それぞれに特産的な農産物があり, ひとつの例外を認めると農産物交渉そのものが成り立たなくなる」

この英文(1)は現代英語での3人称単数中性代名詞所有格 'its' が自然に日常の政治・経済の分野において使われた立派な用例である。即ち3人称単数中性名詞 each country を受けて its が使われているということ。

又今度は私が大学の講義「英文法講義・演習」で何年か前に使用していたテキストで偶然開き見していたページに its が次々と出ている段落があったので, 今度は学問の分野での一例として次に挙げておこう。

(3) A complete description of a language would include not only a description of its syntax, but also descriptions of its phonetics (the sounds of the language), its phonology (the way in which these sounds combine), its morphology (the formation of words), and its semantics (the meanig of words and sentences).

この英文の要旨を日本語で出しておくのと次のようになる。

(4) 「言語の記述を完全にするには, その統語論, その音声学, その音韻論, その形態論, 及びその意味論となるであろう。」

そして又コンパクトな例ではふと思ひ出す諺とかに次のようなものもあるだろう。

- (5) a. Each country has its own anthem
b. Every cloud has its silver lining.

他の人称の代名詞の所有格である my とか your や, 又3人称でも his, や her 等は使われる機会も頻度も沢山あるようだがこの中性の its は余りそう頻繁には使われないであろうが, まあそれでも以上のように幾つか思い当たるようである。まあそのように3人称単数中性代名詞の所有格は 'its' なのである。

そしてここで一先ず現代英語で使われている人称代名詞を単数形だけ表化しておくのと次の通りである。

(6) 表 1

数	人称 格性	3 人 称		
		男 性	中 性	女 性
単 数	主 格	he	it	she
	所 有 格	his	its	her
	目 的 格	him	it	her

2. 古期英語での 3 人称単数中性代名詞属格 — his —

それでは先ず一番古く遡ってアングロ・サクソン時代においては、この 3 人称単数中性代名詞の属格形（結局現代的には所謂「所有格形」のことである）はどうであったかという、これは結論から先に言っておくと 'its' ではなかったのである。そもそも 'its' 等という語は存在しなかったのである。ではどのような語であったかという 'his' という語であった。当時の人称代名詞の関係箇所を表にしておくと次のようになる。

(7) 表 2

数	人称 格性	3 人 称		
		男 性	中 性	女 性
単 数	主 格	he	hit	heo
	属 格	his	his	heore, hyre
	対 格	hine	hit	hig
	与 格	him	him	heore, hyre

この表の通りに中性代名詞は男性代名詞と共通して使われる格形があったのである。

そしてその中性代名詞の属格は次のように使われていた。

(8) a⁶⁾ Sprytte seo eorðe growende gærs ⁊ sæd wyrcente ⁊ æppelbære
treow wæstm wyrcente æfter his cynne, GENESIS I -11

注 6) 拙編 (1989c.) 『GENESIS IN 4 VERSIONS — OE, ME等への入門として』 P 4より。

(=May the earth sprout grass growing and making seeds and the tree making fruits after its kind.)⁷⁾

b⁸⁾ Soðlice ælc libbende nyten, swa swa Adam hit gecygd, swa is his nama. GENESIS II-19

(=Soothly each living animal, as Adam call it, so is its name.)

c⁹⁾ ..., ac si hit eall on fyre gebræd : etað his heafod ꝛ his fet ... EXODUS VII-9

(=..., but may it be all roasted on fire : eat its head and its feet ...)

これらはそれぞれ、先ず(8 a)では treow (=tree)という単数中性名詞が his で受けてあり、(8 b)では単数中性名詞 nyten (=animal) が hit で受けられており、その次にその hit が his で受けてある。(8 c)では結局は lamb を指している hit を his が受けている。

以上のように古期英語では hit (=it) の属格は 'his' であったのだ。

3. 中期英語での場合

次に段々と時代が降りて中期英語の時代になると、人称代名詞を通して初期では古期英語との境い目で似通いがあるが、途中では場合によって色々と異形も起り、殊に3人称関係では男性・中性・女性・複数の中に同形が出る程の混用振りもあるが、末期頃迄には統一性とか簡略性とか新語性とかになってくる。関係部分を次のように表にまとめておく。

(9) 表 3

数	格	3 人 称		
		男 性	中 性	女 性
単 数	主 格	he a	hit it a	heo he sche
	属 格	his	his it	hire hir her
	目的格	hine him	hit him it	hire hi her

注 7) 以下現代英語訳は著者による、なるべくの直訳である。

8) 同上書より。

9) 拙著(1993d)『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』II.1.1. (p. 50) より。

そしてそれらの中、中性代名詞の属格の使用例は次のもの等である。なるべく前の古期英語時代の用例にそっくり対応する箇所での用例を選ぶことにしよう。(従って現代語訳はそのを参考にすればよいので、省略する。)

- (10) a¹⁰ The erthe brynge forth greene earbe and makyngē seed, and appil tre makyngē fruyt bi his kynde, *GENESIS* I-11
 b¹¹ ---; for al thing that Adam clepide of lyuyngē soule, thilke is the name therof. *GENESIS* II-19
 c¹² 3e shulen not eten of it eny thing raw, ne sothun with water, but oneli rostid with fier; the heed with his feet and ---. *EXODUS* VII-9
 d¹³ Whanne thow worchist the erthe, it shal not 3iue thee his fruytis; *GENESIS* IV-12

この(10 a, c, d)は未だなお古期英語の場合と同じ'his'でtre(=tree)を受けている。(10 b)は屈折属格を使わずに、別表現即ち'therof'(=of it)を使っているので比較・対照ができないが、丁度ついでに、又of句を使うのが中期英語の特徴でもある。次例等のようなものである。

- (11)¹⁴ a. the name of it is clepid Galaad. *GENESIS* XXXI-48 (前版)
 b. the name therof was clepid Galaad. *GENESIS* XXXI-48 (後版)

そして又更に中期英語でのもう一つの特徴というか、これは全くの新型であるが'hit'や'it'をそのまま名詞の前に置くやり方が英語史上14°以降稀に起る。Mustanoja (1960)が二三の用例を挙げており、次にその一例を示す。

- (12)¹⁵ and kepe to hit and alle hit cors clantly fullfyllē (Purity 264)
 (=and keep to it and all its body cleanly fulfill)

注10), 11), 13) 前掲拙編書 p. 4, p. 16, p. 30より。同書は観音開きで一目瞭然各時代の英語の推移や異同が観察できるように編まれているので色々活用できる。

12) ここでは、前掲箇所より少し前のところから、文脈がよく判るように、少し長目に採っておいた。

14) 拙論(1993a)「Me所有格の使用傾向 — 屈折形とof句 — Wycliffite GENESISの場合」のII.2.より。なお又先の(10d)の用例も同拙論のI.2.1に所載である。

15) T F Mustanoja repr 1985 *A Middle English Syntax*, Part I (orig 1960)のp. 157下より。
 この例は *OED* では初出であり、13°とあるので14°で *E. E. Allit. P. B. 264*で、末尾が *ful fyllē* となっている。

従ってこの時代で一応言えることは、中性名詞や3人称単数中性代名詞を受けて所有を表す表現をなす場合には、古期英語時代の‘his’を使ったり、又非常に多くの場合名詞+of+名詞や名詞+of+itというようにof句を使ったり名詞+therofを使ったり、或は又稀用であるがhitやitを名詞の前に置くというやり方であった。構造記述化してまとめておくと次のようになる。

- (13) {
- A型 ... { $\begin{matrix} N^{neut} \\ it \end{matrix} \}$... [_{NP} [_{Del} his] [_N N]] ...
 - B型 ... { $\begin{matrix} N^{neut} \\ it \end{matrix} \}$... [_{NP} [_N N] [_{PP} of { $\begin{matrix} N^{neut} \\ it \end{matrix} \}$ }]] ...
 - C型 ... { $\begin{matrix} N^{neut} \\ it \end{matrix} \}$... [_{NP} [_{Del} { $\begin{matrix} hit \\ it \end{matrix} \}$ }] [_N N]] ...
 - D型 ... { $\begin{matrix} N^{neut} \\ it \end{matrix} \}$... [_{NP} [_N N] [_{AP} therof]] ...

後世近代英語での‘its’の誕生の大本の萌芽をなしたのがどうもこの中期英語期末期に芽を出したこのC型だったのだろう。

4. 近代英語での場合——‘its’の誕生——

上のように中期英語時代の色々な使われ方が受け継がれて近代英語時代に入ってくる。それらの状況を Shakespeare の英語で見てみよう。

(14)¹⁶⁾ a. Laft night of all,

When yond fame ftarre thats weaftward from the pole,

Had made his courfe t’illume that part of heauen

Where now it burnes, *Marcellus* and my felfe *Hamlet* Ii 35~38

(昨夜のこと、極の西方に今あるあの星が、道をとって、ほら今輝いている天のあの部分をさそうとしたその時、マーセラスと私は)¹⁷⁾

b. There is a Willow growes afcaunt the Brooke

That fhoves his horry leaues in the graffy ftreame, *IV* vii. 168~

(川をよぎる柳がその白い葉をほの暗い川面に映していた。)

注16) 拙論(1993f)「Shakespeareの言語研究 — Hamlet in Q₂ — 英語の史的発達 —」のII.1(8)より。

17) 以下断らない限り日本語訳は著者による。

これらの例は先ず古期英語以来の、中期英語を通しての、受継がれた 'his' である。即ち (14 a) では、も早や文法性的にでなく意味的に中性の *star* が *it* で受けられ、更に所有格 'his' で受けられている。(14 b) ではやはり意味的に中性の名詞 *willow* が *his* で受けてある。

次にそれら *his* の代りに 'it' が使われている例を挙げる。

(15)¹⁸⁾ a. But anfwere made it none, yet once me thought

It lifted vp it head, and did addresse

It felfe to motion like as it would fpeake : *Ham.* I ii 215~7

(ところがそれは答えませず、ただ一度はその頭を上げまして、何やらもの言いたそうな動きをいたしはしましたが。)

b. The corfe they follow, did with defprat hand

Foredoo it owne life, twas of fome eftate, *Ham.* V i 213~4

(葬送られて行くのは、自分の手で命を亡した者だ、身分は高い。)

この (15 a) には *it* が幾つも出ているが、ここには顕現はしていないがこの *it* は the apparifion 即ち「亡霊」をさしている。そして *it head* 即ち [_N, [_{DET} it] [_N head]] として所有格のつもりで、'it' が使用されているのである。又 (15 b) の方では the corfe 即ち corpse (=dead body) は Ophelia のであり、それを受けての *it* である。

この *it* にしても並々ならぬ努力心の結果での使用であつたらう。男性代名詞 *he his him* の *his* とは区別しようとして、*it* の毛色の所有格を使いたい。ところが本来使われてきたのは 'his' であつた。それではどうしようもない。'it' を使わざるをえなかつたのだろうか、とにかく 'it' を使ってしまったのだ。貴重なる 'it' である。

そうしてそうこうしている中に、'its' という形態のものが遂に現われてきたのである。この 'its' の出現は英語史上 16^c 末で、17^c にはよく使われるようになった。OED の初出は 1598 年となっている。

その実使用例文をフランツ (1968) から二三挙げよう。

注18) 前掲拙論 (1993f) の II 1.(9)より。

- (16)¹⁹⁾ a. With its sweet air : Temp. I.2. 393.
 b. Heaven grant us its peace, Meas. I.2. 4.
 c. Lest it should bite its master, Wint I 2. 157.

5. その作因は？

以上のような過程を経て 'its' が誕生した。16^c 末の誕生で現世紀までもう 4^c もの間そのまま使われている。そしてこの小論昌頭のかの Donkel の記事に生き続けている。もう安定しきっていて、これ以上に変遷することはない。

どうしてこのように 'its' という形態をとるに至ったのか？ 想像することだけしかできないが、小論の途中でも何かと適所において筆者の感じをも述べてきたが、ここで又今度はそのことだけを述べてみよう。

勿論中期英語時代に、3人称中性単数代名詞の属格 his の代わりに hit や it そのものを使ってみようという動きもあって、その同じことが近代英語時代にもあったこと。この傾向は、やはり何ととっても、3人称単数男性代名詞 he の属格 his と同形の 'his' を区別して中性代名詞だけにしか使えない形態を求めようとした努力の心のなせる業であったろう。そしてその後が 'its' になるのだが、その前に OED は 'it's' の形を挙げている通り、この 'its' の '-s' は所謂英語の典型的な「所有格」形態素である。従って、その前段階で折角名詞の前に置く努力をした 'it' を、今度はどうにかして——いやそんなに何もきばらなくても事はすむ——「所有格」の形にしようとしたのだ。その結果が 'it's' であり、そして 'its' だったのである。

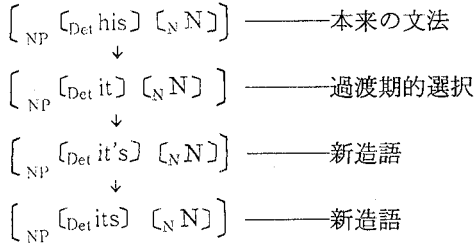
可視的にまとめておこう。

注19) W.Franz 1939 rev.

斎藤静他訳 1968 『シェークスピアの英語』の §319より。

更に、この件に関して、Schmidt (1962) *Shakespeare-Lexicon* の Its の項 (p. 601) の Hml. I.2.216. V.1.244 との指摘は間違いではないかと思う。参考までに、その二箇所例は私の小論では (15a,b) に挙げてある。

(17) 近代英語期での 'its' 誕生への動き。



そしてこれは結局どうしようもない選択であり、どうしようもない新造語であったのである。

引用文献

朝日新聞 1992年9月2日(水)付。大阪：同社。

Franz, W. 1939 rev. 『シェークスピアの英語』東京：篠崎書林。

斎藤 静他訳。1968。

Mustanoja, T F. 1985 repr. *A Middle English Syntax*, Part I (orig 1960)
東京：名著普及会。

菅沼 惇 1989。『GENESIS IN 4 VERSIONS —— ME, OE 等への入門として ——』大阪：大阪教育図書。

————。1993_d。『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』香川大学教育学部研究叢書3。高松：香川大学教育学部。

————。1993_a。「ME所有格の使用傾向——屈折形と of 句——Wycliffite GENESISの場合」『研究報告』。高松：香川大学教育学部。

————。1993_f。「Shakespeareの言語研究——*Hamlet* in Q₂——英語の史的発達——」『研究報告』。高松：香川大学教育学部。

参照文献

江川泰一郎 1955。『代名詞』英文法シリーズ4。東京：研究社。

Murray, I.A.H. et al (eds)1970. *The Oxford English Dictionary*. London : Clarendon Press.

中尾 俊夫 1972。『英語史Ⅱ』東京：大修館。

Onions, C.T. 1965 repr. *An Advanced English Syntax*. London : Routledge and Kegan Paul.

Schmidt, A 1962. *Shakespeare-Lexicon*. Berlin : Walter De Gruyter & CO.